

# 保 育 入 門 (十二)

倉 橋 惣 三

## 九、幼稚園教育の方法

### 第三、其の手段 (つゞき)

#### 四、談 話

一

唱歌、動作遊戯、手技、圖畫が發表的要素を主とせるに對して、談話は享受的要素が主となつて居る。即ち、幼兒は聽話の間受動の態度をとらなければならぬ。幼稚園教育の手段中、幼兒の舉動を靜止せしめ、其の發聲を沈黙せしめ、所謂じつとしたる位置を要求する唯一の場合には恐らく談話の時である。此の場合に於て、相互中心的關係は談話者中心、すなはち保姆中心となる。此の點に於ても、他の手段とは其の趣を異にするのであ

る。しかしながら之等は皆外から見た形である。其の手は靜に膝の上であり、口は堅く閉ぢられ其の眼は一向に談話者に注ぐと雖も、幼兒は決してたゞ受動者としてのみ居るのではない。況んや其の心的活動は靜止して居るのでは決してない。否寧ろ歌を唱ひ、繪を描いて居る時よりも一層微細なる又放奔なる、心の活動をなして居るのである。熱心なる興味を以て談話を傾聽して居る時の幼兒は、身體を其の椅子の上に殘して、心は其の談話の世界に活潑なる知情の生活を營んで居るものといふことが出来る。之れを内部的自發性の活動と名づける。此の内部的自發性の活動は音樂を聽い

て居る時にも起つて、それがおのづから外にあらはれて、手振足振りともなる。聴話の場合に於ては斯くの如き著しい表出とはならないが、音楽の場合よりも一層觀念的に明瞭なる世界をつくつて其の世界の中に感覺し、知覺し、思考し、感じ、欲し、行ふ生活をして居る。

素より談話にも種類があつて、たゞ或る觀念の傳達供與を目的とする機械的のものに過ぎないのもあるが、特に幼稚園教育の手段としての談話は聽者の内部的自發性を刺激し促進し活動せしむるものでなくてはならない。而して、之れをなすは外からの作用ではあるが、其の本元は寧ろ内にある。蓋し、談話の内容は苟もそれが幼兒に適當し喜び迎へらるゝものである限り、幼兒の心的欲求に合して居るものである。其の心的欲求は、意識的なるものと無意識的なるものと別はあるが、いづれにしても、幼兒の心的生活の中心的機能をなして居るものである。談話の内容が、その欲求

に合致した時に、聽者の心的生活の全體が活動して來る。して見れば、談話によつて促された内部的自發性は、實は幼兒自ら始めから所有せる處のものである。尙進んでいへば、談話そのものが外から作られたものでなくて、此の欲求を基として作られたものである。古から傳はつて居る國民童話、最もよく幼兒の心を理解せる作者によつて創作せられた假作談話、いづれも皆之れに他ならない。言は少しく奇の様であるが、幼兒の喜ぶ談話は、もと之れ幼兒の自發性の産物といふも不可ないのである。

## 二

談話が訓話教説教授の性質と同一視せらるゝこと往々陥る誤りである。彼に於ては單に理性の領會を目的として、知識を聽者の心に植ゑつけてゆく働きである。談話にあつては、聴話の心的全活動を目的として、そこに一個の心生活をなさしめるのである。即ち、兒童に對する談話は一個の藝術

であつて、談話者は藝術家である。藝術の特色は其の具體性にある。すなはち談話は抽象なる觀念の言語ではない。茲に談話の興が存し、力が存し、効果が存する。若し、談話が此の具體性を失つた時、それは談話としての生命のないものである。幼兒教育の手段としての價值のないものであることも勿論である。

話し方の工夫は、其の細部の技巧は暫く別として、之れを要するに此の具體性の發揮にある。話術といふも、熟達といふも、談話を聴かして其の具體的性質を充分ならしめるにある。之れが爲には談話者が、その談話を筋として又意味として、なく、具體的に所有して居ることが最も必要である。

### 三

談話が情緒的基調に及ぼす影響に至つては、實に大なるものがある。元來談話は兒童の欲求の所産であるから、其の局部々々が知識的、科學的に正確でないこともあり、又正確でなくとも必ずしも不可ないのである。所謂科學的には荒唐無稽に類することであつても、それを以て直にその談話の第一價值を否定すべきものではない。すなはち

談話に於て何よりも重要とする處はその情緒的内容にある。全體としては勿論部分としても、情緒的に不適當と認むべき點のあるものは、全然排斥せなければならぬ。然らざれば、幼兒の情緒的基調に悪影響を與ふるからである。凡そ知識の誤りは後に至つて訂正すること必ずしも難くない。しかし、情緒的悪基調は遂に訂すべき機がない。

談話の選擇の第一要點とする處は、すなはち此の點にある。宇宙萬般のこと、人事界、自然界、新古、内外の別なく何の材料と雖も皆談話の中に採り入れらるべき自由なる領域を有して居る。斯くの如き點よりして何等の制限はない。たゞ、其の情緒的内容如何の一點あるのみである。

且つ又一方には、その談話の有する美しき情緒をして、充分に聽者に徹底せしむることをつとめなければならぬ。而して之れが爲には話術の技巧によるまでもあるけれども、其の根本は談話者が、其の情緒を充分に感得して居るや否やによることである。「感ずることなくして歌はしむる勿れ」といふ如く、「感ずることなくして話しする勿れ」といふも敢て誇張ではない。